

# ヤブカンゾウ（ワスレナグサ）

牧 幸 男

新緑に降り注ぐ梅雨の雨、いわゆる青梅雨の頃、突然、梅雨空に太陽が顔を出すと、もう真夏と変わらない光の強さを感じる。間もなく本格的な夏の訪れを予感する季節である。水原秋櫻子は、

**青梅雨の 雲しりぞけつ 白鷺城** と詠んでいる。



この頃、田圃の土手や草原に目立つのがヤブカンゾウの花である。私はこれまでこの植物名はヤブカンゾウが正しいと思っていた。しかし『新訂牧野新植物図鑑』では、ワスレナグサが正しい植物名で、括弧書きでヤブカンゾウとなっている。今回、どちらの植物名で記述するか考えたが、ワスレナグサではムラサキ科の植物と混同するので、ヤブカンゾウの植物名を使うことにした。

ヤブカンゾウは、全国に分布するユリ科の多年生草本である。この植物は類似のノカンゾウより、全体が大型で、花は合生した花被の筒部が短く、花被がその先端から急にロート状開いていることと、普通八重咲であるので区別ができる。葉は刀状で多数二列に出て下部は互いに重なるが上部は次第に開いて円を描いて先は下垂している。夏には、外側に近い葉の間から高さ1~1.5mの花径が伸び、太くて緑色、先は二つに分かれ径8cm程のユリに似た花を開く。花は黄赤色の筒状の花で、早朝に開き夕方にしぼむ「一日花」である。この植物は八重咲きが普通であるが、三倍体のため結実せず、<sup>ほふくけい</sup>葡萄茎（ランナー）を出して増殖する。ヤブカンゾウの本種はホンカンゾウ（別名シナカンゾウ）*Hemerocallis fulva* L.で、中国に原産し日本には帰化していない。草姿はヤブカンゾウとそっくりであるが、花は黄色の一重咲なので区別は容易である。この植物も三倍体で種子ができない。ヤブカンゾウの特徴はヘメロカリス属唯一の八重咲で、歴史的帰化植物の一つで中国から渡来したものと考えられている。当時から、食用、薬用の目的で栽培されていたが、次第に野性化したとみられている。



生薬の金針菜（食用にも使用）

このような経緯から、わが国では多くの書籍に記録が残っている。『万葉集』（629~759）、『続日本紀』（697~797）、『枕草子』（1000頃）161段に「萱草の名で登場」等に記載されているように、古くから親しまれてきた植物であろう。『万葉集』に4首詠まれているが、表記は全て萱草となっている。しかし、該当する植物ははっきりせず、ノカンゾウ、キスゲなどいずれを指すか不明である。この植物の特徴について『今昔物語』（1120~1449）の巻31の「兄弟二人殖萱草紫苑物語」に詳しく記述されているが、最後の記述は「然れども喜しき<sup>しか</sup>事<sup>うれし</sup>有らむ人は紫苑を殖る常に見し、憂へらむ人は萱草を殖る常に見しとなむ語り伝えたとや」と結んでいる。この中で紫苑を「思草」、萱草を「忘れ草」と記述している点に注目したい。

類似植物に禅庭花、別名ニッコウキスゲと夕菅、別名キスゲがあるが、両者とも花は黄色主体の一重咲きである。

古くから親しまれてきた植物だけに歌題の対象によく選ばれてきた。

野萱草 ひきし田水の 岸となり 木津物芽

植物名について、牧野富太郎博士は『この植物の基本形が日本に自生しないホンカンゾウ *H. flava* (種小名は茶褐色の意) で、萱草の本体であろうが、中国ではこの花を見て憂いを忘れるという故事があり「忘れる」に憂いの文字を宛てることから萱草と称する。日本名は漢字の意識で、ヤブカンゾウは藪に生えるため、ノカンゾウは人の集落に近く生ずることをうまく表現している。』と述べている。和名のワスレナグサは『和名抄』(932) に、この植物に萱草の漢名をあげ、一名忘憂、和名和須礼久佐



と記載が要因とされている。萱草の言葉は「萱」は「諼」の転じたもので、「諼」は「忘」と同義であるというので「萱」の字を用いたとされている。その要因は、この植物の若芽や金針菜を食べれば、浮世の苦しさを忘れることができるという『詩経』(BC9世紀~BC7世紀頃)の「食之令忘憂」によっている。別名のワスレナグサ(勿忘草)、忘憂草、金針菜などはこれ等の理由からである。

その他、各地に生育し食用に使われることから、アマナ、カンゾウナ、ピョピョなど多く別名もある。このうちナ(菜)の字が使われるのは、野菜としての地位があるから、ピョピョは子供達が根元の白い部分を強く吸うとピーピーと音が出るからで、私の子供の頃はこの名前前で呼んでいた。

学名は *Hemerocallis citruna* で、属名は *hemera*(一日)+*callos*(美)で一日の美しさ(一日花を示す)で、種小名はレモン色の意で花の色からである。英語も Daylily である。中国には黒い種子ができ、花が重弁化してない種類があるが、この植物をわが国ではホンカンゾウと呼び区別している。

薬物として正式な地位を得るのは宋代(960~1279)からで、唐慎微他が著した『嘉祐本草』(1090~1116)が最初とされている。ここでは「別名を忘憂、鹿葱、鹿剣、妓女、宣男等と称し、鹿葱は鹿の解毒、宣男は麩妊した婦人がこの草を身に佩びれば男子を生む。」等の記載がある。この説は明(1368~1644)の徐光啓(1562~1633)の『農業全書』(1639)に引用されるようになる。

薬用は、6~7月頃開花直前の蕾を採り、蒸してから日干にしたものを生薬名「金針菜」と呼んで解熱、黄疸、利尿に使う。また、根を水洗後日干にしたものを生薬名「萱草」と呼び、消炎、利尿、むくみに使っている。

食用には春、芽が出始めの若葉と花の蕾を使う。若菜は歯触りが良く甘みがあるので、おひたしや酢味噌和え等で食べる。蕾について李時珍(1518~1593)は「現に東方地方ではその花附を採り、乾燥して商品にし、名称を黄花菜と呼んでいる。」と述べているように古くから中華料理に「金針花」、「黄花菜」の名で使われている。また、根を砕いて水にさらすと澱粉がとれるので、昔は救荒食料としていた。

花言葉は「憂いを忘れる」、「悲しみを忘れる」、「愛の忘却」である。

